

「説唱芸能＜唱南游＞の語り」 続編Ⅳ

訳・廣 田 律 子

※ 9号・10号・11号・12号に引き続いて訳を試してみる。

「神娘！釜に、野菜の棚に、かめの中に、食物がある。自分で持って来て食べなさい。」

神娘は食物を取って食べた。奥の方で「ドン、ドン」と音を立てて、「うんうん」と唸り声がする。

「おばさん、どうして唸っているか。」「わたしの背中に腫れものができて、こうして治療しても治らない、ああ治療しても治らない。」

「わたし神娘が来たから、治して上げることができる。」彼女は灯を持ち上げて、おばさんの着物を捲って見ると、「ああ！あなたの二つの腫物はもう腫れて、その先が白くなった。わたしが神剣でそれをつついてやぶれば、すぐ治るよ！」「つついてやぶれば、死んでしまうほど痛むだろう。」

「まあ！方法がある。」神娘は灯を持って外へ出て行く。

奥の方からまた「うん、うん！」と叫び出す。

神娘はまた灯を持って奥の方に入ってみる。「おばさん！わたしがそれをつついてやぶって上げようと言うと、あなたは死んでしまうほどと言った！さて！どうしようか。」

「わたしの息子はとても親孝行で、わたしが痛み出すと、よく撫でてくれた。」

「あなたの息子はどこに行ったのか。」

「今日は柴の市がある。彼は柴を背負ってお城のあたりで売るために出かけて、まだ帰らない。夕方に帰ってくると言ったが、今まで帰って来ない。わたしは痛んでたまらない！」

「お兄さんが帰って来れば、撫でてもらうことができるのね。」

「息子は帰って来れば、撫でてくれる。よく撫でると痛みが軽くなる。」「わたしは撫でて上げよう。わたしが息子さんの代わりに！」

「いらない！」

「わたしの目上の方として、撫でて上げよう！」神娘がまだ手を伸ばさないうちに、そのおばさんは、「うん、うん！痛くてたまらない！」と大声で叫び出す。

「わたしがまだ撫でて上げないうちに、あなたはまた叫びだして……」「わたしの息子は孝行で、痛み出すと、口で吸ってくれるのだ。」

「そんなこと、わたしにはできない！」神娘はまた出て行った。奥の方でおばさんは天や地に呼びかけて、「痛い、痛い」と叫んだ。

神娘は考えなおして、盧山の祖師のお言いつけでは、妖怪に遇えば退治しなければならない、人に逢えば助けてやらなければならないと言うのだ。わたしは彼女のために吸って上げよう、吸ってから吐き出せばいいだろう！

「お前はそれを吸ってから吐き出せば、わたしはそれで痛んで死んでしまうかも知れない！」

「そんなら、わたしはできない。」と言って出て行く。

奥の方ではまたうんうんと叫び出す。盧山の師の奥様は、妖怪に遇えば退治しなければならない、人に逢えば助けてやらなければならない、と言った。神娘はこれを考えると、戻って、「おばさん、それを吞めばよくなるなら、わたしもそれを吞んでしまうようにしよう。」

「神娘！とてもきたくないものよ！」

「そう言わないで、わたしの目上の人がそんな病気にかかったら、わたしもそれを吞んでしまうだろう。」そして、おばさんの着物を捲って、口で吸う。始めて吸うと吞んでしまう。二回目吸うと、吞んでしまう。三回目吸うと吞んでしまう。四回目吸うと吞んでしまう。五回目吸うと、それが膿や血だと思いながら吐き出した。

歌う 一口の赤いものが地面に落ちると、香山の仏母は空から呼び出した。

十四！十四！お前は最後に吐き出すべきではない。

お前は五色の雲を得る命数がなく、宿命として四色の雲しか得られない。

仏母の御身からの赤いものを地面に落として、若い命から三年の寿命を減らされる。

神娘は赤いものを地面に落として、甘んじて若い命から三年の寿命を減らされる。

仏母が御姿を現して下さるようお願いし、わたしがはっきり拝見でき

るようにお姿を現して下さい。

十四よ！わたし仏母の姿を見たいなら、お前の若い命から三年の寿命が減らされる。

仏母のお姿を拝見さえできれば、甘んじて若い命から三年を減らされる。

内壇娘娘馬一駕、盧山の神娘は若い命が減らされる。

内壇大士馬一駕、大慈大悲は御姿を現す。

台詞 皆さん！神を敬えば神はいらっしゃる。仏を敬えば仏は現れる。これはよく言われる言葉だが。

歌う 陳十四は仏母が御姿を現すことを願うために、若い命から三年の寿命が減らされる。

台詞 彼女に姿を全部見せてやる必要はあろうか。雲の目を打ち開けて、ただ、仏の片手を現して見せよう。

歌う 香山仏母はお手をちょっと振ると、陳十四仏の子は雲に乗ることができる。

内壇大士馬一駕、香山仏母は雷音に帰る。仏の子に雲を与える功労は大きく、自ら宝の馬をもらって俗世を加護する。

内壇娘娘馬一駕雲四切れ、盧山神娘は雲に乗る。

「夫人伝」にこのことはさておき、話を変えさせて、後にまた続けて語ろう。

十二月冬の末に陳宅は、家の暮らし向きが悪くなった。

台詞 皆さん！陳宅はどうして衰えたか。以前、この家は非常に繁昌したが、林氏、王氏の婚礼のためにずいぶんお金を費やし、老法師の誕生日祝いのためにお金を費やした。お金を使い切って、この家の暮らし向きが悪くなった。

法青は、「以前、この地方の人がお肉をもらいたいと言えば、家は、たたくさんやーやった。今は自一自分さえ、お肉を食べーべられない！盧一盧山、茅一茅山の祖一祖師にお願いーいしょう。俺一俺は祖師の壇をしーしつらえて、三番目の妹が盧一盧山から早一早く帰って来一來るように、加一加護して下さい。」と言うと、法器を取り出す。

歌う 法の壇や祖師の供え台をしつらえて、壇に立って法を行う。

頭に神雲や神額をかぶり、身に神衣や神袴を着る。

足もとに占い具が置かれ、手で印を結び口で盧山の玄妙な法の本を唱える。左手に鈴を持ち、右手に竜角を持って、竜角がびいびいと霊壇にひびく。

台詞　神娘は竜角の音を聞くと、今日はお正月の一日で、どんな人が竜角を吹き鳴らしているのだろう、と言った。神娘は竜鳳の占いを行ってみると、ああ！あの長生の次兄だ。彼はお正月一日に竜角を吹き鳴らして、わたしが早く盧山から帰って来るように祈っている。この地方の人は、お正月一日に竜角を吹き鳴らす者が良心の良くない者だと言うだろう。わたしは閉山訣を行って、すべての法器の音を消してやろう。

歌う　二回目の竜角の音がびいびいとひびいて、竜角の音が盧山、茅山にひびきわたった。

台詞　ああ！竜角を吹いても音がなく、まったく火吹竹のようだ！おお！太鼓一鼓をたたいてみよう。力いっぱい敲いても音がなく、竹の蓆を敲くようだ。おお！鈴を振っても音がない。

法青は「どんな妖怪が俺と法の戦いをしているのか。俺一お一出てみよう。」と言う。法青は大門まで行って、彼の神眼で照らすと、おお！法を学んだ三番目の妹が帰って来た。

俺にじゃまをした。俺は妹のお前を宝と見るが、お前は俺を一本の草と見一見ている。

「妹さん、家の暮らしはた一たいへん窮屈になった。三一三回の食事もよく調わない。お一お父一父さんは背中に腫物ができて、仕事に出られない。法通は南江で妖蛇に食一食われた。俺は、この地方の人は子一子授かりを俺に頼むぐらいで、俺があまり役に立たないと言う。お父一父さんの背中の腫物は、命にさわりはないが、観世音さまに申し上げたら、仏の童を遣わしてその五つの金の鉤を取り出して下一下さるだろう。」

陳神娘は部屋に入って、「お父さん！娘がお目にかかっている！」「おお！十四、お立ちなさい！」

「お父さん、ありがとう！」神娘は目上の人に挨拶すると、「お父さん！盧山でわたしは神娘と名づけられた。お父さんも神娘と呼んで下さい。」

「神娘！俺は背中に腫物ができて、とても苦しい！」神娘は近寄って着物を捲って、手を伸ばして触るなり、腫物が落ちた。手で触ってから、痛みが止み、頭も冴えるようになった。

歌う 内壇大衆神一駕、老法師の病気がなおった。神娘は部屋を出て、二階の建物に登った。聖母はお香を点して祖師を拝み、目を閉じて祖師さまを心で考える。

弟子は廬山に行って、法の伝授を受けてから、祖師の壇にお香や灯をつけずに、ひっそりさせて来た。

廬山で法を学んでから家に帰って、再び祖師の壇にお香や灯を整えて上げる。

雷霆大士観音仏、左右にある対の句を眺める。西方の竹葉は千年まで緑、南海の蓮の花は九品のかおりが溢れる。

仏母の前でお祈りをして、廬山の神娘は観音さまを拝む。

弟子は廬山に行って法の伝授を受けてから、仏母の供え台にお香や灯をつけずに、ひっそりさせて来た。

廬山で法を学んでから家に帰って、お香をよく整えて、この二階で読経する。

内壇大士一駕娘々一駕、十四は南雲楼で読経する。

お経を唱えたり、仏を拝んだりして、仏を拝んだり、お経を唱えたりする。

台詞 二法師は外の庁堂にいる間に、地元の人が来て、「二法師！お宅の三番目の妹さんは帰ったのだね！」と叫んだ。「帰って来た！」「一斤のお茶を持って来たから、飲んでごらん。」

この人が出て行くと、外の人が来た。「二法師！お宅の三番目の妹さんは帰って来たのだね。」

「帰って来た！かーかえて来！」

「帰って来たから、お家にお客さんが多いだろう。」この人は柴を持って来て、あの人はお米を持って来る。さらにお肉を送るのもある。人々は行ったり来たりして、お祝いを述べる。

法青は、「大一大きな鬼をみーみーみた！三番目の妹が帰ってくる前に、

法青と呼ばれるだけだった。法師とも呼ばれなかった。三番目の妹が帰って来ると、二一二一法師、二一二一法師ととても親切に呼ぶようになった。この一の人はこちらを送ったり、あの方はあーあーれを送ったりした！」

歌う　二法師は喜び、大勢のお祝いに来た客で賑わっている。

一日、二日、次に三日、香炉のお香が燃え尽き、水時計の音だけが残っている。

三日が過ぎると、四日になり、五日に刺繍の衣をよく干す。

新年は旧年よりもっと目出たく、どの家にも新春を賑やかに祝う。

正月の八日は長い八日で、廟に入ってお香を点して神さまを拝む。

この「夫人伝」に、陳宅の陳林氏のことを述べよう。彼女は今までのことを顧みてひそかに将来のことを思いめぐらす。

義妹は廬山で法を学んでから、家に帰って、廬山洞の光景をよく知っているはずだ。

大法師は夢で廬山を見回ったことがあるから、廬山洞の光景をわたしはよく知っている。

今日は暇で仕事がなく、二階に登って義妹に聞いてみよう。

廬山洞の光景の話が合うなら、本当に廬山洞の門に入ったことになる。

廬山洞の光景の話が合わないなら、廬山洞の門に入らなかったのだろう。

思いをめぐらす陳林氏は、急いで南雲楼に上がった。

南雲楼に上がると、廬山神娘に迎えられる。

迎えられた長兄の嫁は部屋に入って、各々席に着いて挨拶をする。

お姉さんはどうして、南雲にいらしたのか。

わたしはこの二階に上がって、お妹さんが廬山大洞門で法の伝授を受けたことについて伺いたい。

廬山洞はどの方向にあるか。洞の入口はどの方向に向かっているか。

廬山までいくつの駅があるか。駅毎に何人の兵士が鎮守しているのか。

廬山にはいくつの洞があるか。その洞をどんな精が守っているのか。

あなたの廬山洞の光景の話が合っているなら、廬山の大洞門に行ったのは明らかだ。

盧山洞の光景の話が合わないなら、盧山の大洞門に行かなかったのだろう。

今日は暇があるから、盧山洞の光景を話して下さい。

台詞 「お姉さんが、わたしが盧山に行ったか、どうかを疑って、聞きに来ることは分かっていたから、わたしはそのことを書き記して、彼女を待つようにした。いずれ彼女が尋ねて来れば、わたしは話して聞かせよう。」と盧山神娘は言う。

歌う 長兄の嫁は南雲に座り、義妹は盧山の光景を話して聞かせる。
お姉さんは南雲楼に座って、わたしは盧山の光景を話して聞かせよう。
長兄は南江で蛇妖を退治するうちに、その場で蛇に殺された。
次兄は凶報を知らせに帰って、両親やお姉さんは涙をほろほろ流して悲しむ。

わたしは南雲楼から下りて、両親や兄さん姉さんを拝む。

盧山洞で法を学んでから、南江に行つて蛇妖を斬殺して兄を救助したいと言った。

両親とお兄さん、お姉さんは心配して、わたしが盧山に行くのは困難だと心配した。

妹として兄の仇を討つべきで、夜の三更に家を出た。

考えがあれば遠路を恐れず、気があれば道の歩きにくいことを恐れない。

盧山は微かな処だが、仏母の香盤を導きとして行く。

南雲楼で二人のお姉さんに頼んで、わたしの代わりにお姉さんたちは両親に孝行して下さい。一枚の書置が机の上に置かれ、墨と硯で押さえられる。

生死や艱難を仏母さまに頼って、香盤を抱いて旅立つ。

南雲楼を離れて、わたしは花園に行った。

花園の門にかんぬきはあるが、鍵はかけられていない。花園を出て、香盤を頭に頂いて、旅立つ。

三步ごとに一度拝み、四歩ごとに一度跪く。お香の煙について道に行く。

わたしは煙が南へ漂うのを見ると、お香の煙について南へ行く。

お香の煙が南から北へ漂うと、そのお香の煙について東南西北どこでも

行く。

自分の家から十里ほど離れると、万頂山の上に妖怪が出て来た。

仇討をしたい腹痛鬼は、わたしを敵とした。

わたしは万頂山に近寄ると、一陣の妖気に襲われた。

腹痛がしてたまらない。わたしは涙を流して悲しんだ。

法を学んでから洞を出る日があれば、万本のお香を焚いて、聖君にお礼を申す。

五老天尊のお助けに頼って、この山を出ることができた。仏母の香盤が地に落ちたので、道が分からなくなって進みにくい。

三叉の入口で一人のお嬢さんにあった。温州から来た李三と言う人だ。彼女は盧山で法の伝授を二年半受けてから、父のお墓を作るために家に帰った。

法を学ぶために盧山に戻るつもりで、わたしと義姉妹の契りを結んで、保護してくれた。

温州の李三をお姉さんとして、わたしは妹になる。

一度お祈りしてから立ち上がって、姉妹二人は旅立つ。

中途に黒宿嶺に来ると、蜘蛛と蝙蝠の精が出て来た。

憎らしい二人の妖怪は、わたしを嫁にしようと迫った。

幸いに温州の李三姉は、妖怪に媒酌人をさがしてくるように責めた。

妖怪は一枚の金光葉をさがして来て、媒酌人として花婿を拳で三回殴ってやるように言って、蜘蛛や蝙蝠の妖怪を痛め付けた。

二つの千斤の槌で続けて打って、蜘蛛や蝙蝠の妖怪をしっかりと地に打付けた。

妖怪の魔力のある浮苔岩の関に来ると、二人の姉妹は道を歩きにくくなる。

お互いに刺繍の靴をはきかえて、わたしはお姉さんの花模様の手拭いを手に持つ。

ゆっくりと歩いて、浮苔岩の関を通った。

二人の姉妹が関を通り、二人の妖怪はびくびくする。

わたしは槐陰寺に来ると、そこに馬聖僧がいる。

一本の黄金木を贈られて、彼は蜘蛛や蝙蝠の精を放してやった。
無情で義を知らない二人の妖怪は、馬達、馬聖僧を焼死させた。
何よりも怪しいのは、悪蛇の妖怪は、わたしの替玉を使って廬山に行った。

廬山の祖師は誤って、妖怪を廬山に留めて法を伝授してやった。わたしは廬山に近寄ると、李三姉に聞き出した。

廬山は前か、後か、東か、西か。

近いか、遠いか、早くわたしに知らせて下さい。

李三姉は玄妙な言葉を使って、わざと遠回しに言ってくれた。

前でなければ後、東でなければ西だ。

遠いか、近いかと聞けば、遠いと言えば天のあたり、近いと言えば目の前だ。

わたしは李三姉が見つからなくなって、道が分からず歩き出せなかった。
左の方は岩で、右の方は万丈の深い淵だ。万丈の岩の側から水に身投げすると、李三姉は花模様のある手拭いを投げてくれた。

その手拭いが一本の金橋に化けてから、また漂って行く。

明らかに一本の金橋がありながら、その手拭いが漂って行く。

今後わたしは悟りを開く時に、花模様のある手拭いのような長い旗で願ほどきをする。

一本の金橋を通して、廬山の大洞門に来た。

わたしは廬山洞に来ると、唐、葛二人の將軍は真君に知らせた。

廬山の祖師は誤って、妖怪を人間と見なし、人間を妖怪と見なした。

法力を蛇の妖怪に伝授し、わたしを寒い洞に入れて苦しめた。

幸いに香山観音仏は、許真君を突き刺いて、三つの目のある者にならしめた。

天の簞や地の網を張って、四面山で蛇妖を覆った。

わたしは寒い洞から出て、祖師を大洞門で拝んだ。

廬山の祖師は、前に誤って妖怪を留めた。

妖怪は前の洞から出て行ったが、廬山でお前に法を伝授することは難しい。

一人の師は二人の弟子を教えることができず、後の洞に行って、目上の師の奥さんを拝んでくれ、と言った。

神娘と名づけられ、羊肉の饅頭をお菓子にもらった。

吉日に竜鳳の占いを教わって、過去や未来を先に知ることができる。

第一冊の法の本を熟読すると、川や海を干して妖怪を捉えることができる。

第二冊の法の本を熟読すると、岩や洞をこわして妖怪を捉えることができる。

第三冊の法の本を熟読すると、雨を降らして俗世の民を助ける。

第四冊の法の本を熟読すると、法を行って疾病を追払って妖怪を捉える。

第五冊の金亀背の法の本を学ぶと、地面から三尺飛上がってから雲に乗ることができる。

第六冊は死んだものを蘇生させる法で、煉た丹薬で白骨を蘇生させて民を救う。

第七冊は分娩を促す本で、それを読むと、俗世の婦人が安産できる。

わたしは盧山の正しい教えを受け入れるが、分娩を促す本だけは読みたくなかった。

盧山の法を全部習得してから、盧山の師はゆっくり話してくれた。

全部の鍵をわたしに渡して、師と奥様は天上に上がった。盧山の景色を見ないで、几帳面に洞の中にいるように言いつけられた。

盧山の洞の入口は壬丙に向い、洞の南の方は火丙丁に当る。

紅光火と号する盧山の洞があり、それに近寄っては危い。

九節伏竜は洞を守り、五岳高登はお堀を守る。

武当山玄天上帝は座っており、左右に亀、蛇の二人の将軍が仕えている。

鵠安麻丈大之師、六丁六甲は雷を司る。

盧山の方々に九つの壇があり、壇毎に天甲兵が守っている。

盧山にどれだけの兵があるかと聞けば、盧山の兵は百万以上ある。

わたしが洞の景色を見たがっていることを知ると、壇毎に壇の門を開けて迎えてくれる。

わたしは第一洞に来た。一洞を鎮守しているのは老竜の精だ。

わたしが洞の景色を見たがっていることを知って、牙をむきだし、爪をふるってラーラーと声を出す。

一洞の金門には金の錠がかけてあり、二羽の金燕が両側にある。

金の机の上に金瓶が置かれており、金の柱に金竜や金斗星がある。

金の猫、金の獅子が机に置かれており、右の玉柱に玉の麒麟がある。

昼に生の鋼鉄を食い、昼に黄金を排泄し、夜に銀を排泄する。

わたしは第二洞に来た。二洞を守っているのは虎の精だ。

わたしが洞の景色を見に来たことを知ると、頭を振り、尾をふって歓迎する。

二洞の銀門には、銀の錠がかけてあり、銀の椅子が両側にある。

銀の机の上に銀瓶が置かれており、銀の柱に銀竜や銀斗星がある。

宝物のたまる鉢があり、昼に黄金が生え、夜に銀が生える。

わたしは遊びに第三洞に来た。三洞を守っているのは猴の精だ。

わたしが洞の景色を見に来たことを知ると、頭を振り、尾をふって洞内へ案内してくれた。

三洞には玉門に玉の錠がかけてあり、中に玉の椅子が両側にある。

玉の机の上に玉の瓶が置かれ、玉の柱に玉の竜や玉斗星がある。

宝物の金のなる木が置かれ、昼に黄金が落ち、夜に白銀が落ちる。

わたしは遊びに第四洞に来た。鼠の精が四洞を守っている。

わたしが洞の景色を見たいことを知ると、わたしを迎えて洞内へ案内する。

宝石門に宝石の錠がかけてあり、宝石の椅子が両側にある。

宝石の机に宝石の瓶が置かれており、宝柱に宝の竜や宝斗星がある。

麝香の珠一粒が置かれており、そのかおりが庁堂に溢れて皆を喜ばせる。

わたしは遊びに第五洞に来た。蛭蚣の精が五洞を守っている。

わたしが洞の景色を見たいことを知ると頭を振り、尾をふって洞内へ案内してくれる。

五洞には、水晶門に水晶の錠がかけてあり、水晶の椅子が両側にある。

水晶の机に水晶の瓶が置かれており、水晶の柱に水晶の竜や水斗星がある。

夜光の明珠一粒が置かれており、俗世の秤で量れば一斤の重さがある。

前門は玻璃瓦で飾られ、真中に一つの月台がある。

金糸の石盤には漆塗りの竜があり、瑪瑙の柱には白玉が嵌められている。

わたしは辺洞まで遊びに行くと、辺洞では呼ばないと開かない。

夏の土用に、ここにいればすがすがしく、寒い季節に、ここで暖かいお茶を飲む。

石門には石の錠がかけてあり、石の椅子が両側にある。

石の机には石の瓶が置かれており、石の柱には石の竜や石斗星がある。

わたしは辺洞の奥まで遊びに行くと、一對の白兔が踊っているのがめずらしい。

瑪瑙の門には瑪瑙の錠がかけてあり、瑪瑙の椅子が両側にある。

瑪瑙の机に瑪瑙の瓶が置かれており、瑪瑙の柱には瑪瑙の竜や瑪斗星がある。

上には三教の祖師の供え台がしつらえられてあり、その左右に対句が眺められる。

三教の祖師は正道に従い、五雷祖師は靈壇を庇護する。

左に乾坤鏡が置かれており、右に陰陽鏡の宝が置かれている。

下に大きな供え台が置かれており、豊作の五穀の宝物がある。

左に宝の鴛鴦瓶が置かれており、右に宝の合仙瓶が置かれている。

一つの七絃琴が置かれており、大変めずらしい宝だと言える。

お香を焚き、ロウソクを点せば、人が弾かなくても琴の音がする。

お香や灯を消すと、かすかな琴の音がなくなる。

下に神仙毯が敷かれてあり、上に珍珠の簾が掛けられている。

白鶴の形の瓶の中に清い水があり、蛇妖を斬殺できる七星宝剑がある。

わたしは後洞まで遊びに行くと、赤々と仙樹が繁る。

一つの仙桃を取って食べると、渴も飢も覚え、道心をもつようになる。

七仙亭の門前に来た。石の箱に石の錠がしっかりかけてある。

わたしが錠を解けさせる呪文を唱えるなり、石箱の錠がすぐ解けた。

石箱の石の錠が解いて、天地をひっくり返す本がその中に蔵されてある。

わたしはその本を開けて読むなり、天が何回か上へ突きあたるように

なった。

天を支える白玉の柱が何回かひっくり返り、廬山の大洞が三尺ほど移った。

わたしはびっくりして、頭がふらふらになりぼんやりした。

金のかんざし一本が地に落ちて、ようやく天地が落ちついた。

この気分が凌霄殿まで突通ると、玉皇大天尊には分かった。

調べによって、許真君の弟子がみだりに天地をひっくり返す本を読んだことが分かった。

徒弟によく教えなかったのは師の過ちで、廬山の許真君には罪がある。

上聖に千万遍も懇願してから、わたしの若い命が減らされた。

師と奥さまは天上から帰って、わたしは出迎えた。

師と奥さまはわたしを責めた。わたしは涙を流して自分の罪を認めた。

お前は大洞に入って、大罪を犯したのでお前の若い命から三年の寿命が減らされる。

お前はもう法力修練の成果を挙げたから、廬山の大洞門を出てもよい。

紙の鈴、紙の竜角、紙の神剣などの宝をお前に贈る。

紙の宝馬一匹をお前に贈って、その馬を万里雲と名付ける。

四面山で宝物を取替え、蛇妖の持っている宝物を取返すべきだ。

師と奥さまを拜んで別れを告げてから、大洞を出た。当時、廬山洞は一年に一度開く。

蛇婆は洞を出た時にそれを十年と改めたが、わたしが「ノ」（はね）を加えると千年になった。

唐、葛の二将が、わたしが「ノ」を加えてはいけない、千年になるのは長すぎだと言った。

わたしはさらに「千」の字の下に「一」を加えて、廬山大洞が四壬四寅の年に開くように改めた。

唐、葛の二将が見送って、わたしは四面山に來た。

蛇婆大妖怪に逢うと、彼女と法の戦いをして宝物を取換えた。

蛇婆は万里雲に乗ったが、雨に濡れて泥々になってしまった。

蛇婆妖怪は鳥に化けて、再び南江殿へ逃げ帰った。

わたしは宝物を取替えたので、嬉しくなり、竜角をきれいに洗いたいと思った。

五竜潭の中から竜角が音を出して、その音が天地を震わせた。

盧山大洞は海に落ちて、わたしの持っている法の宝が洞の中に取返された。

わたしは盧山洞に戻って、大洞門の中で祖師を拝んだ。

法の宝を返していただきたい。わたしは大洞を出て、蛇妖を斬殺して兄を救うために南江に行く。

盧山の法の宝は庫に戻って来るのはやさしいが、庫を出ることは絶対できない。

千万遍懇願しても許されず、後の洞で師の奥さまを拝んだ。

師の奥さまは後洞に蔵してある古い法の宝をわたしに贈ってくれた。それは古い鈴、古い竜角、古い神剣だ。

さらに一本の竹の棒をもらったが、それを用いて俗世の災いを払って平安を保つことができる。

五行八卦で妖怪を捉える。一本の難香をもらった。

大難に遭ったら、それを口に銜えると、盧山の後洞でお香を焚くのと同じようになる。

わたしが洞を出てから、災難に遭うと、師の奥さまは法を以て救援してくれた。

神雲や神額、ひとそろいの神衣や神袴をわたしに贈ってくれた。

牡丹の花舟一艘を贈ってくれた。盧山の竜角の音を聞くように言付られた。

盧山の太鼓の音が聞こえれば、目を開けて故郷に帰ってはいけない。

盧山の太鼓の音が聞こえないと、安心して目を開けて故郷に帰れる。

竜角が一声ぴいぴいとひびくと、草の舟が色彩を帯びる竜の舟となった。

山に逢えば、山の上を通り、川に逢えば川の上で漂う。

草の舟の化けた舟に一つの孔ができて、わたしは万里林で災難に逢った。

一本の難香を口に銜えると、盧山の後洞の門にお香が焚かれた。

盧山の師の奥さまが占いで分かると、汪、楊の二人の將軍を遣わしてく

れた。

牛頭、馬面はわたしのいる処を測って、神剣で一本の大神路を開いてくれた。

天地や明るい月が見えるようになって、わたしはようやく順調に道を歩けた。廬山の法は茅山の法に逢い、利花山の上で陳姓の者に逢った。

伯父は参将、息子は十二と言う。十二は三分は神骨の持主だ。

十三歳で少林寺に行って武芸を学び、六年ほど茅山で法の伝授を受けた。家に帰ると、父母は亡くなり、家計は非常に窮屈だ。

峰の上に茅屋を建てて、通行人から金をむりやり請求する。

十二兄にその地方のことを司らせて、その地の男女を加護させる。

わたしが鳳凰嶺に来ると、そこにある人間の骸骨は銀のように白い。

その妹は南京上元県の人で、鉄板橋頭に住んでいた陳姓の者だ。

父は上界で、母は金氏、妹は陳十五と言う。

伯父は兵を率いて琉球国に行き、下男の陳陸は十五を家に送る。

鳳凰山の上で盗賊に逢って遭難した。わたしは彼女を生き返らせた。

次に黒宿嶺まで来た。そこに蜘蛛、蝙蝠の妖怪が出た。

黒宿嶺の上で雷火を放って、蜘蛛の妖怪を焼き払った。

後洞の蝙蝠は逃げて命拾いをして、瑞安の飛雲江まで逃げて行った。

黒宿嶺でわたしは占いを誤ったので、後にいやなことに逢った。

雷火で金鐘洞を焼き払って、黒宿嶺では災難を根絶した。

柳の木の下で聖僧を助けて、宣楊太師として地方の平安を保つようにさせた。

鎮江で馬宅の六人姉妹を助けて、疫病を司って地方の平安を保つようにさせた。

揚州の江都県に来ると、天然痘にかかった馬容を助けてやった。

杭州の銭江県に来ると、北星街の外王志君のことが分かった。

彼は王葛氏を娶り、絹の販売で六音に行った。

葛氏お姉さんは金のかんざしを贈って、金のかんざしを印としてこそ、帰って来る人を夫と認めると言った。

青風山の上に透天洞があり、五百年の修行を積んだ猪の妖怪がそこにい

た。

この妖怪は占いで葛氏夫婦が災難に遭う運命であることを知って、和尚に化けて俗世に行った。

絹屋の前を通ると、王志君はこの和尚にお経や社会を正すのための文章を読ませた。

金のかんざしを黄金木のものに取替えて、王志君は一人で出かけたのに、二人の王志君が家に帰って来た。

目上の両親は判別が付かず、葛氏お姉さんにも判別できない。

下男や下女たちも判別できず、そっくりの二人の姿に判別できない。

目上の人は誤った考えをして、外の庁堂で武芸くらべをやってくれと言った。

勝った方が真の者とされ、負けた方が偽の者とされて、王大人は自分の肉親を傷めた。

猪の妖怪は猪の殴り方ができて、その殴り方で王志君を殴った。

妖怪を息子として留めて、偽の者を留めながら真の息子を追出した。

幸いに葛氏は聡明な人で、下男の下王に二百両の銀を持たせて遣わした。

川で身投げしようとする王志君は王に助けられてから、一緒に占いの店に行った。

二郎は頼まれて妖怪を捉えようとしたが、かえって妖怪に殴られて、ころがりながら家に帰った。

役所に訴えるつもりで出かけて、意外にも高橋でわたしに逢った。

わたしは天の籠、地の網で王宅を覆ったが、猪の妖怪は知らない。

杭州の城外で災いを払って、男女を保護して吉祥を保つ。

王宅で猪の妖怪を退治して、王宅もその地も太平になる。

王葛氏は金盤で子を授けることを司り、王志君は子を授ける張仙となる。

張二郎は正乙総管となり、同じ壇で法を守り、平安を保つ。

鼓楼の前で林六を助けて、癩病のことを司らせ、人人の安寧を保たせる。

富陽県で鉄の杵を取上げて、老葉を土陰神になるように命じた。

青同県を同店県と改名して、この地名は万古まで伝わって行く。

七里壟で鴨の妖怪を退治して、七里壟の地方は太平になる。

わたしは蘭溪県に来ると、蘭溪県は太平の地だ。

わたしは蘭溪の景色を眺めながら、ここの百姓がどんな人かと測ってみたいと思った。

五昼夜続いて遊覧したが、一人の婦人もいなかった。

蘭溪県はなんといいやらしい地方だろう。悟りを開いた時に、蘭溪の宮で休むことをしない。

蘭溪の川がいつも流れて行くように、蘭溪の人の子孫はいつも世間で放浪する。

金華の大橋で白馬を退治して、金華には太陰宮を建てた。

永康で石獅子を退治し、夷尖と言う地名に改めてやった。

南方の各地を回ってから、義烏県で鵄の妖怪を退治した。

東陽県で飛ぶ簫の妖怪を退治して、義烏の東陽の地方は太平になる。

岩園で石の獅子を退治して、岩園の地に災を根絶した。

岩園門を岩園屋と改めて、今まで長く伝わって来た。

縉雲で帚の妖怪を退治して、縉雲県には太陰宮を建てた。

次に天台嶺に来た。園岩洞の中から妖怪が出た。

九尾の狸の妖怪は、洞内で五百年修行してきた。

わたしが処州に来ることを知ると、もんどり一つ打って逃げ去った。

范師府が命数で災いに逢うのを知って、難を避けるために范師府の身辺に行行った。

天の簍、地の網で范宅を覆ったが、狸の妖怪は知らなかった。

石碑で園岩洞を塞いで、妖怪が洞門に入ってはいけない。

天台嶺を桃花嶺と改名させて、万古までこの地名が伝わっていく。

九里でごみとりの妖怪を退治し、谷倉で鼠の妖怪を退治した。

ごみとりや鼠の妖怪を退治すると、九里、谷倉の地は太平になる。

次に左直門、右直門に来て、鯉魚の妖怪を退治した。

左直門を大水門と改名し、右直門を小水門と改名させた。

次に下河灘に着いた。花模様のある舟がそこに泊められている。

船賃が銀一两二銭と定められ、下河灘を相公灘と改名させた。

わたしの舟が仁塔の側に来て、舟から下りた。この宝塔が地方の平安を

保ってきた。

石帆上村で猪の子の妖怪を退治し、下村で猪の妖怪を退治した。

八角井のほとりで魏英を助けて、彼女が值壇使者となって、平安を保つように命じた。

刀口で雄鶏の妖怪を退治して、刀口を臘口と改名した。

小衆灘のほとりに白布の妖怪が出て、彼が小衆地祖となって平安を保つように命じた。

隔歩の地に花牛の妖怪を退治して、隔歩の地方で災が根絶された。

次に青田の石門洞に来て、白羊の妖怪を退治した。

白羊の妖怪は、わたしが処州に行くことを知ると、もんどり一つうって逃げ去った。

白羊は徐角へ逃げた。わたしはそのうちゆっくりあいつを捉えようと思った。

石碑で石門洞は塞がっていて、妖怪がその洞門に入ってはいけない。

陳村で櫛の妖怪を退治して、陳村地租がこの地の平安を保つように命じた。

陳村は陳塗と改名して、この地名が万古まで伝わって行く。

青田の小溪で豚の頭の妖怪を退治して、青田の小溪は太平になる。

青田から歩いて岸を離れて、岸を離れてから西門宮に着いた。

わたしは竜角を三回続けて吹鳴らすと、三回の竜角の音が景寧県までひびいた。

天仙の麻姉さんはこの音を聞いて、すぐ雲に乗って西門宮に来た。

むやみに宮の敷地を争うために法を五昼夜戦わせても勝負がつかなかった。

幸いに大士観音仏が降臨して、主人と客の身分を公平に定めて下さった。

金巷口で桁の妖怪を退治し、巷潭で白鳥の妖怪を退治した。

二つの妖怪を退治すると、巷口、巷潭の地は太平になる。

桃水亭で婦人の妖怪を退治して、青田の城の物見櫓の神となるように命じた。

汪、楊の二将を遣わして、徐角山の上で白羊の妖怪を捉える。

青田の道を歩いてから舟に乗って、金星と劉郎の舟は順風に進んでいく。
水潭で金持の妖怪を退治して、水潭の地は太平になる。
水潭は朱石と改名してこの地名が万古まで伝わっていく。
沙村で雉の妖怪を退治して、沙村の地方は太平になる。
沙村は沙埠と改名して、この地名が万古まで伝わっていく。
温溪の横浦口で赤い腹掛けの妖怪を退治して、温溪の横浦口の地は太平になる。

烏岩頭で斑の鰻の妖怪を退治して、烏岩頭の地は太平になる。
烏岩頭は花岩頭と改名してこの地名が万古まで伝わっていく。
次に、高沙は白沙と改名して、今まで伝わって来た。
西溪の臨福塔で鷺の妖怪を退治して、西溪の臨福の地は太平になる。
浮石岩で鴨の妖怪を退治して、浮石岩の地には災を根絶する。
小歩ですっぽんの妖怪を退治して、小歩の地方は太平になる。
没人舌で黄牛の妖怪を退治して、担頭の没人舌は太平になる。
蒸籠山で鯰の妖怪を退治して、蒸籠山は石鐘山と改名した。
白路漣で鷺の妖怪を退治して、この地名は交魚岩と改名した。
次に六舌に来了。六舌山には陰陽岩がある。そこで、銅の尼の妖怪を焼
払って、一つの和尚岩が残った。

次に温州の三十二という地に来て、そこに一つの山がある。
次に江北の鮮鱗の川を順風に進んで行く。
九匹の竜が集まって珠を争う地で、竜角を三回吹き鳴らして宮の敷地の
ために印をつける。

三条江で敷布の妖怪を退治して、三条江のほとりは太平になる。
西角岩の側で舟が岸について、一匹の白羊を褒美にやった。
正直な二人の兄弟のために、太平を保つような占いをしてやった。
わたしは温州府に来了。温州府の地方は太平だ。
わたしは温州府の景色を見回って、ここに好い人がどれくらいいるかを
測ってみたい。
わたしは温州府の人たちを尊重して、温州には多くの太陰宮があるから。
前に話した二人の青田人は、お城のあたりで白羊を売ろうとした。

朔門城のあたりの後洋巷は、いつまでも巷名が伝わって行く。

後にまた放羊岫と改名して、いつまでもこの地名が伝わっていく。

白羊は石門洞まで逃げて行くと、石碑が門を塞いで入れない。

忠義な白羊は石碑にぶつかって死んでから、白羊洞祖として平安を保つように命じられた。

八仙楼の下で鄭英を助けて、肺病のことを司って、平安を保つように命じた。

師府の庁堂で狸の妖怪を退治して、師府の庁堂は太平になる。

范公欽が願ほどきのことを司って、男女の人たちを保護して平安を保つように命じた。

そこから出ると南門の外に来て、巽山で白鶴の精を退治した。

白鶴の精を退治してから、巽山の地方は太平になる。

梧誕頭の板橋で亀の妖怪を退治して、梧誕頭の板橋の地方は太平になる。

次に白象橋のほとりに来て、宮の敷地のために印をつけて平安を保つ。

魚潭で金魚の妖怪を退治して、魚潭の地方は災を根絶する。

わたしは瑞安県に来て、瑞安県の地方は太平だ。

瑞安の人が忠義でよく親や兄弟に仕えるのを見ると、わたしは家に帰りたくなる。

汪、楊の二将を遣わして、廬山の大洞門に帰った。

わたしは飛雲渡に来た。飛雲渡には妖怪が出た。

黒宿嶺の上でわたしは占いを誤ったので、蝙蝠の妖怪が飛雲江へ逃げた。

わたしがそこに来ることが分かると、埠頭に一艘の舟が置かれた。

わたしが埠頭で舟に乗ると、舟は飛んで行くように進んでいった。

舟が川の中流で沈むと、廬山の師の奥さまには分かった。

汪、楊の二将を遣わして、廬山の兵、鴨をつれて来た。

鴨は竜のひげの蓆を銜えて、わたしを載せて埠頭まで送ってくれた。

飛雲の渡し場で蝙蝠の妖怪を退治し、飛雲渡には太陰宮がある。

平陽の霊門で双小星を退治して、邱富を助けて家に帰らした。

わたしは邱進の息子を助けて、願ほどきのことを司って平安を保つように命じた。

飛雲嶺の麓で忠義な犬を助けて、その犬が頭を振り、尾をふってわたしにお礼を言った。

飛雲嶺の上で馬扁山を助けたが、お米を食べる人間には良心がない。

畜生は済度しやすいが、人間は済度しがたい。

これから丹薬を煉て白骨を蘇生させることをしない。

丹薬を煉て白骨になった人間を蘇生させることをせず、まだ白骨にならない死者だけを助けてやろう。

汪、楊の二将は指図をして、丹薬を煉て、兄の白骨を蘇生させなければならない。

皇帝さまのお旨がなければ、丹薬を煉て他の人の白骨を蘇生させることをしない。

紅江渡の渡し場のあたりで林九を助けて、天然痘のことを司って平安を保つように命じた。

青竜江の出口のほとりで李十三を助けた。彼女は難産で亡くなった。

九回竜角を吹き鳴らしても生き返ることができず、わたしは彼女を助けるために冥土に行った。

九牛耕地の法で泰山殿をこわそうとしたので、わたしの若い命から三年の寿命が減らされた。

血池を突破って大罪を犯したので、わたしの若い命から三年の寿命が減らされた。

助けた十三は家に帰って、男女たちを保護して吉祥を保つ。

わたしが青風嶺に来ると、観世音さまは茅屋三室に降臨した。

命数によって五色の雲を得られず、四種類の色彩の雲しか得られなかった。仏母の赤い唾を地に落としたので、わたしの若い命から三年の寿命が減らされた。

わたしは仏母にお姿を拝見したいと願ったので、わたしの若い命から寿命を三年減らされた。

十二月の二十九日に雲に乗ることができて、正月の一日に家に帰って来た。

正月の八日に南雲楼に上がって、南雲楼の上で読経する。

わたしは廬山で法の伝授を受けてから、家に帰り、道中に妖怪を退治して人を助けた。

如実に詳しく事情を話して上げたが、お姉さんはよく聞いてくれたでしょうか。

お妹さん！貴女は本当に廬山洞で法の伝授を受けたが、他の人を助けるだけで、お兄さんを助けられないのね。

台詞 「お姉さんは冗談を言っているわね。お兄さんを助けられないはずがないだろう。お兄さんのためにこそ廬山に行って、法の伝授を受け、ありとあらゆる苦勞をした。」と神娘は言った。

神娘は心中ひそかに思うには、お姉さんは恐がりやすい人で、恐がるようなことを言われると、おとなしくなるから、おどかしてみよう。

歌う お姉さんよ！わたしは他人を助けてやれば名誉なことになるが、お兄さんを助けても、何も得られない。

お兄さんは助けられずに死んで、法通お兄さんを助けようがない。

お妹さん！お兄さんが死んだから、蘇生させることができないなら、わたしはむだにお願いしたのね。あきらめた。

台詞 「お姉さん！お兄さんを助けようがアろうか。このことはあなたの仕業から起こったのだ。わたしは七歳の時に南雲楼で話合っているうちにあなたを怒らせたことがあるが、あなたはそのことで恨みをいただくべきではない。お父さんが五十九歳で六十歳の誕生日を祝った日に、あなたはわたしがお二階から下りて誕生日祝いをしたくないと言ったから、酔ったお父さんは南雲楼に飛び込んで、仏母の仏体をこわしてしまった。そのおかげで、お兄さんは南江に行って蛇妖退治で殺された。そのおかげで、わたしは廬山に行って、法の伝授を受けるためにありとあらゆる苦勞をした。」と神娘は言った。

歌う お妹さん、たいへんな大間違いをしたのはわたしだ。お妹さん、許して下さい。

なんと言っても両親さまの顔に免して、お兄さんを助けて家に帰して下さい。

台詞 「お姉さん！お兄さんを助けられないはずはない！だけど、お兄さんを助け

るのはやさしいことではない。仲良の姉妹たちが法の本を熟読してから、妖怪退治してこそ、お兄さんを助けることができるのだ！妖怪退治できないければ、お兄さんを助けることができない！」と神娘は言った。「お妹さん！さっそくお兄さんを助けて家に帰らして下さい。」

「あなたがそんなに焦っているなら、わたしは期日を選んでみよう。仲良の姉妹たちを集めて、法の本や神の冊子をよく考え、皆熟読した上で、南江に行って蛇妖を退治しよう！」「お妹さんの言うことはもっともだ。」

歌う お姉さんと妹の二人はよく話し合い、林氏姉さんは南雲楼を下りる。
神娘は盧山の法によってよく考えて、暦で吉日を選び定める。

選び定めて吉日は正月の十九日で、六人のお姉さん、九人の妹さんが来てくれる。

正月の十九日を選び定めて、親しい六人のお姉さん、九人のお妹さんが集って来る。

法の本や神の冊子をよく考えた上で、神娘は決心することが出来る。

九日、十日、十一、十二日、十三日には元宵節で灯籠が点される。

十四、十五、十六、十七、十九日の期日が来る。

十九日の日になると、神娘は南雲楼を下りる。

台詞 「お兄さん！九層の台を組み立てることができるか。」「組みーみーみ立てる九一九一九層の台、俺は玄人ーとーとだ！」「お兄さんが九層の台を組み立ててくれば、わたしは六人のお姉さんと九人の妹さんを集めて、法の本や神の冊子を一緒によく考える！」

歌う 二法師は九層の台を組み立てると、盧山神娘は九層の台に上がる。

祖師の供える台や焼香の台をしつらえて、壇に立ち、法を行って法事をととのえる。

頭に神雲や神額をかぶり、身に神衣や神袴を着る。

足もとに古い具が置かれ、手に印を結び、口で盧山の玄妙な法の本を唱える。

左手に鈴を持ち、右手に竜角を持って、竜角の音がびいびいと霊壇にひびく。

竜角が一回びいびいとひびいて、三界の総符使を迎えると称する。

二回目竜角の音が道壇にひびいて、千聖万聖を迎えると称する。

三回目竜角が雷の震えのようで、三界の符使は自ら降臨する。

台詞 「神娘さま！符使は叩頭する！」「符使さん、お香や灯を点する机でお待ち下さい。わたしは六人のお姉さんと九人の妹さんを集める文書を書くので、各州、各県に送ってもらいたい。」

歌う 外壇符使馬三駕、お香や灯を点する台の上で文書を待つ。

内壇娘娘馬一駕、盧山神娘は文書を書く。

神娘が筆を持つのを待って、文武の兄弟たちに通報する。

六人のお姉さん、九人の妹さんに通報して、陳宅に集まって法の本をよく考える。

一通の手紙を書いて、封筒に入れておく。

台詞 「符使さん！」「はい！」「ここにある文書を各州、各府、各県に送って、六人のお姉さん、九人の妹さんを陳宅に招いて、一緒に法の本や神の冊子を考えるようにして下さい。」

歌う 外壇符使馬三駕、三界の符使は急いで文書を送る。

符使は竜駒馬を走らせて、上下三界に文書を送る。

文書が各州、各県に送られて、六人のお姉さん、九人の妹さん、文武の神たちは皆この事情を知った。

青竜江のほとりに住んでいる李十三は、文書を受け取って事情が分かった。

お父さん！盧山の神娘は蛇妖を退治するために、わたしに助太刀を頼んだ。

十三！神娘はお前の大恩人お姉さんで、神娘に助太刀をするのが当たり前のことだ。

十三さまは嬉しくなって、目上の人にお礼をして出かけようとする。

外の庁堂で送別のお酒を用意して、出かけようとする娘十三をもてなす。酒宴が終わり、箸などが片付けられてから、李大人はゆっくり話し出す。

蛇妖退治のために、お前は南江へ行けば、第一、三思を要する。

お父さんのお言付けに従って、わたしはよく覚えて気をつける。

酒宴が終り、箸や杯がしまわれて、目上の方にお礼をしてから旅立つ。

娘々馬表十五駕雲一片、六人のお姉さん、九人のお妹さんは雲に乗る。

衆神五駕雲一片、文武の神は雲に乗る。

各州、各県から離れて行く。廬山の神娘はゆっくり話します。

台詞 「お兄さん！あなたは外へ行って見てごらん。六人のお姉さん、九人のお妹さん、文武の神はもう来たか、どうか。」

「六人のお姉さん、九一九一九人の妹さんはそーそーそこにいる。すぐに来るのだ。」と二法師は言う。

「余計なことは言わないで、行って見てごらん！」

二法師は大門を出て、神眼で眺めると、おや！「妹一と一とさん、今日雲が多く、雨が降らず、ただ人間が堕ちて来た。」

「もういい。あなたはお客さまを迎えなさい！庁堂をよく整えなければならない。」

「分かった。おーおーおれは行ってお客さまを迎えーえーえて来る！彼女たちを家の中に案内ーいーする！」

歌う 文武の神は一斉に来て、陳宅は大門の外でお客さんを迎える。

内壇衆人表五駕、文武の神は雲に乗る。

六人のお姉さん、九人のお妹さんは雲に乗って来て、陳宅は大門でお客さまを迎える。

娘々馬表十五駕、六人のお姉さん、九人の妹さんは一斉に雲から降りて来る。

お父さまを拝み、お母さまを拝み、法青次兄に会った。

林、王二人のお姉さんに会い、廬山大恩人を拝む。

おいしい美酒を飲む、文武の神、六人のお姉さん、九人のお妹さんは美酒を飲み、酒宴が終り、杯や箸が片付けられてから、五行の法の本を一緒に読んで会得する。

台詞 「文武の神、六人のお姉さん、九人のお妹さん、もう法の本をよく会得した。今、日を選び定めて、南江に行つて蛇妖退治で兄を助けることができよう。」と神娘は言う。

歌う 神娘は廬山の法によって、暦で吉日を選び定める。

正月の二十九日は好い日で、この吉日に出かけよう。

光陰は矢の如く、風の如し、月日のたつのが梭が動くように、風が雲を吹くように速い。

正月二十九日になって、神娘は出かける用意をする。

外の庁堂で送別の酒を整えて、送別のお酒を飲んでから出かける。

外壇衆神五駕雲一片、五虎上將は一緒に雲に乗る。

内壇娘々馬十六駕雲一片、六人のお姉さん、九人の妹さんは一緒に雲に乗る。

雲に乗って福州侯官県を離れて、南江殿の前に来た。

子午卯酉の地に兵舎を設営し、前には朱雀に当り、後には安符に当る。

台詞 「金枝お姉さん、銀枝お姉さん、銅枝お姉さん、十二お兄さん、神娘の代りに東営を守って下さい。」「ご命令に従う！」

「玉枝お姉さん、五枝お姉さん、六枝お姉さん、志君お兄さん、神娘の代りに南営を守って下さい。」「ご命令に従う！」

「馬容お姉さん、葛六お姉さん、林六お姉さん、二郎お兄さん、神娘の代りに西営を守って下さい。」「ご命令に従う！」

「天仙お姉さん、魏容お姉さん、鄭師府お兄さん、神娘の代わりに北営を守って下さい。」「ご命令に従う。」

「林九お姉さん、十三お姉さん、十五お妹さん、邱富お兄さん、法青お兄さん、神娘の代りに中営を守って下さい。」「ご命令に従う！」

歌う 五人の上將を遣わして五方を守り、鬼神でもびっくりする。

神娘は廬山の法によって思案を決めると挑戦の文書を書いた。

挑戦の文書が李さまに送られて、竜牙の矢にかけておかれた。

全力をあげて矢を射って、挑戦の文書が後の洞に送られた。

蛇婆妖怪はこれを見ると、齒軋りして大声で叫んだ。

台詞 「あなた！大変だ。あなたは法通をめちゃくちゃに食ってしまった。今日、陳十四は大兵を率いてここに来た。あなたの命は危い。」「本当か、お前！」

「本当だとも、あなたを騙すはずはあろうか。挑戦の文書が送られて来た！」「お前、俺は恐がっている！助けてくれ！」「戦いが始まると、自分を保護することさえできないだろう。あなたは腕をふるって彼女と戦って

みろ。」「お前、お前は俺を助けないなら、俺が出て行くと、冬瓜を切るように切られて、だめだ!」

歌う 蛇妖のいうことはまもなく本当になる。まだ出陣しないうちに、冬瓜を切るようにと言った。

台詞 「わたしたちは南江殿の前の風水殿を先に占領しよう!」出て見ると、
「おや!あの陳十四は変な計略で、先に風水殿を占領した!お金があっても争いの起こる家屋は買わないと言われる。わたしたちは九江山の峰に行って設営しよう。」

歌う 妖怪は九江山の峰に行って設営するために、雲に乗って九江山の峰に来た。

子午卯酉の地に兵舎を設営して、前には朱雀に当り、後には安符に当る。
蛇婆妖怪は考えを決めると、応戦の文書を書いた。

応戦の文書が廬山の法の持主に、期日を約束して勝負を決する。

神娘は廬山の法によって考えを決めて、期日を選びきめる。

戦いの始まりを二月十日に選び定めて、返事を蛇婆妖怪に知らせた。

台詞 文書を書いて貼り出して、祭りの役を勤める家に知らせる。わたしは二月十日に蛇妖と法の戦いを始める。君たちは水を担いで溜めておくべきだ。法の戦いをする日に、蛇の涎が水に落ちれば、その水は飲めない。飲んだら毒になる!

祭りの役を勤める家は、蛇妖が童男、童女をいけにえにすることを強要してきたから、蛇妖をひどく恨んでいる。

陳十四が来たので、皆嬉しくなって、家毎に精進料理を食べ、門前にお香や灯を点する台を高くしつらえて、お香やろうそくを点して、陳十四の戦勝を祈る。

歌う 二月十日が来ると、廬山神娘は法事をととのえる。

大きな広い兵舎で祖師の案をしつらえて、壇に立って法を行う。

神娘は黄い風呂敷包みをあけて、廬山の珍しい法の宝を取出す。

神竜や神額を頭にかぶり、身に神衣や神袴を着る。

足もとに古い具がおかれ、手で印を結び、口で廬山の玄妙な法の本を唱える。

九層の台になる九枚の紙、四本の竹になる四本の灯芯を取り出す。
続いて九つの秘訣を行うと、九層の台が高高と現われる。

九層の台に飛上がって、手に神剣や神鞭を持つ。

左手に鈴を持ち、右手に竜角を持つ。竜角がびいびいと霊壇にひびく。

二回目竜角がびいびいとひびいて、その音が廬山、茅山にひびきわたった。

三回目竜角がびいびいとひびいて、天兵、天将、雷兵、地將は壇に降臨する。

妖怪退治のために太鼓が雷のようにとどろいて、太鼓や竜角の音が神々を香壇の上に迎える。

廬山の立派な強い兵馬を動かし、茅山の強い立派な兵馬を動かす。

神兵、神將は三壇に集まり、雷火、天曹が百万ほど降臨する。

妖怪は洞内の子孫妖怪を動かし、その子孫は各各自分が大將軍だと言う。

茅や菖蒲が竹竿に化け、松の木の葉が飛べる刀に化ける。

木の枝が竜牙剣に化け、柴の葉が盾に化けたり、旗に化けたりする。

神兵神將は妖怪の子孫と戦い、六人のお姉さん、九人のお妹さんは蛇公と戦う。

廬山神娘は蛇婆妖怪と戦い、一緒に法壇に行って勝負を決する。

廬山神娘は八卦の陣をしいて、八卦の陣をしいて妖怪を捉える。

乾は三本の横の線が連なり、坤は横の線が六本に断つ。

震は大きな鉢のように仰ぎ、艮は碗のように伏す。

離は中が空虚で、坎は中が詰まる。兑は上の方が断ち、巽は下の方が断つ。

内には九宮、外には八卦、二十四の方に乾坤を定める。

外には一百八十四、法を行っても、法で逃げても皆順調にできる。

六行を動かして神の兔を探させ、蛇婆妖怪をしっかりと捉えようとする。

巳酉丑は寅午戌と戦い、亥卯未は申子辰と戦う。

七昼夜続いて戦っても、勝負がつかない。

廬山神娘は憂え、六人のお姉さん、九人のお妹さんは元気を損った。

休戦の札を高くかけて、兵をひきもどす。

神娘は盧山の法で兵をひきもどすと、蛇婆妖怪はよく考える。

台詞 ああ！陳十四は、戦ったら勝負をつけなければならないが、二日間戦ってから休み、また二日間戦ったら休む。いつ勝負を決することができようか。蛇婆はまた挑戦の知らせを送って、神娘と戦って、生死をはっきりさせたい。

歌う 蛇婆妖怪は考え定めると、挑戦の知らせを書いた。

盧山神娘に知らせて、期日を定めて勝負を決したい。

神娘は蛇婆の挑戦の知らせを受取ると、再び旗や太鼓などを整えて蛇妖と戦う。

台詞 陳十四は告示を書いて貼り出して、祭りの役を勤める家に知らせる。三月十日に、二回目蛇妖と法の戦いをするので、君たちは水を担いで溜めておくべきだ。法の戦いの日に、蛇婆の涎が落ちれば、その水が飲めない。

歌う 三月十日になると、両方とも兵を動かす命令を出す。

盧山の強い兵馬を動かし、茅山の強い兵馬を動かす。

神兵、神将は三壇に集まり、雷火、天曹は百万以上降臨する。

妖怪は自分の洞にある子孫の妖怪を動かし、その子孫は各々自ら大將軍だと言う。

神兵、神将は妖怪の子孫と戦い、六人のお姉さん、九人のお妹さんは蛇公と戦う。

盧山神娘は蛇婆と戦い、互いに法で戦って勝負を決したい。

一時に一すじの白雲が飄って、二人は戦い合って勝とうとする。

三界雲の中にくるくる回り、五湖四海に風雲が起る。

五雷都総管は戦いに投入し、六丁六甲大將軍も降臨する。

良上七震排三総、八卦を使って身を保護する。

九子九馬九牛法、十通げて行くことが順調にできる。

十人は一緒に色彩の楼を組み立て、妖怪の九子の法が九牛に敵する。

八仙は集まって双竜の法を使い、七星宝剑に二つの金の鉤がつけてある。

六丁六甲神兵は来、五雷都管はいつも身を保護する。

二直平分雷駆護、平地に起った雷の音が天下にとどろく。

十四日間戦い続いて、なかなか勝負がつかない。

廬山神娘は憂え、六人のお姉さん、九人のお妹さんは元気を損った。

休戦の札を高くかけて、兵をひきもどす。

廬山の法で兵をひきもどして兵舎に帰し、蛇婆妖怪は考えを廻らす。

台詞　この陳十四はだめだ。二日間戦ってから二日間休む。時間を無駄にするだけだ。戦ったら生死をはっきりさせるべきだ。「神さまはわたしを加護して、損をさせない。お天気がいよいよ熱くなると、六人の姉、九人の妹は白骨を煉て生返った者で、熱くなるほど元気を損ってしまう。わたしの妖の子孫どもは熱くなるほど、頭と尾が高く上げられる。頭と尾を高く上げるほど強くなる。心配するのは陳十四だけだ。陳十四をわたしの手にすることができれば、六人の姉、九人の妹を白骨に回復させるように煉ることができよう。壁を崩すように、二回ほど押せば大丈夫だ。」と蛇婆妖怪は言う。

蛇婆の考えでは、陳十四は今きっと中営にいるだろう。わたしは夜三更にひそかに中営に入って陳十四の命をとるのがこの上なくよい。

歌う　怪しい蛇婆の妖怪は、平地から風を起して行く。

この「夫人伝」に蛇婆妖怪のことはさておき、廬山陳太陰のことを語ろう。

神娘は中営の内に立って、考えをめぐらす。

南江で蛇妖退治するうちに、二回続けて戦っても勝負がつかない。

廬山の法をよく考えて、陳太陰は一つのことを考えついた。

師の奥さんが五行八卦神差図をわたしに贈ったことを考えついて、五行八卦で妖怪を捉えよう。

夜の三更が過ぎると、五行神図で妖怪を捉える。

廬山の法を繰り返して考えて、夕方に考え定めた。

光が太陽について行ったが、明月に伴って来た。

夕食を済まして一更になり、横町や大通が賑やかだ。

夜が静まって二更になり、廬山陳太陰は考えを定める。

神娘は中営の中に立って、お香やろうそくを点して祖師を拝む。

祖師爺！わたしに五行八卦神差図を贈った。五行八卦で妖怪を捉えたい。

祖師のお助けに頼って、早く妖怪を退治して兄を助けたい。

盧山の法によって真心で祈り、外では蛇妖がひそかに中営に入ってきた。
台詞 神娘が兵舎で祖師に祈りをささげて、五行神差法を行っているうちに、
蛇婆は一本の赤い鉄の釘に化けて、ひそかに中営に入ってきた。二法師は
神眼で照すと、「三三三妹—とさん、お前はわーわーわからない。妖—妖—
妖怪は一本の赤い釘に化けて、鉄の釘から取られたば—ばかりで、赤—赤
く焼かれた。お前の命を取ろうとしている。」と言うと、「妖怪はどこにあ
るか。」と神娘は聞く。「あの一！ここにある。」神娘は金の鉞を放して、妖
怪を殺そうとする。おどろいた蛇婆は、「早く逃げよう！」と言う。
歌う 早く逃げれば一命を取留めることができるが、早く逃げないと命を落し
てしまう。

急いで生死の地を離れ、危険の門から飛び出す。
鳳凰は飛び出そうと、金の錠をねじ切って柵の籠を破る。
鯉が金の鉤を抜けて、いさいかまわず急いで逃げて行く。

台詞 「なんと幸いだろう。あやうく頭と尾が二つにされる処だった。命が危
い！あー！また挑戦の知らせを書いて送り出して、勝負を決するように
はっきりしたい。」と妖怪は言う。蛇婆は考えを定めると、挑戦の知らせを
書いた。

歌う 盧山神娘に知らせて、期日を定めて勝負を決する。
神娘は四月十日に三回目開戦するように蛇婆妖怪に知らせる。

台詞 四月十日に定めると、彼女はまた告示を貼り出して、祭りの役をつとめ
る家に知らせる。四月十日に蛇妖と三回目戦うから、君たちは水を担いで
溜めておくべきだ。法の戦いをする時に、蛇の涎が落ちれば、その水が飲
めない！

歌う 四月十日になると、両方は命令を出して兵を動かす。
盧山の強い兵馬を派遣し、茅山の強い兵馬を派遣する。
神兵、神将は三壇に集り、雷火、天曹は百万以上降臨する。
妖怪は自分の洞の中の子孫妖怪を動かし、その子孫妖怪は各々自ら大将
軍だと称する。

神兵、神将は蛇婆妖怪に敵し、六人の姉、九人の妹は蛇公に敵する。
盧山神娘は蛇婆妖怪に敵して、法の戦いで勝負を決する。

神娘は東方の甲乙木を開け、妖怪は西方の庚申金を開ける。
金は木を克し、蛇婆妖怪は廬山陳太陰の法を破ろうとする。
神娘は金が木を克するのを見ると、南方の火丙丁に回って行く。
火が金を焼いておそろしく、蛇婆妖怪を破ろうとする。
妖怪は火が金を克するのを見ると、北方の壬癸水の中に回って行く。
妖怪は水が火を克するのを以て、陳太陰を破ろうとする。
神娘は水が火を破るのを見ると、中の方の戊己土に回って行く。
土が火を克する、廬山の法、土が水を克して妖怪を破る。
妖怪は土が水を克するのを見ると、東方の寅卯辰に回って行く。
木が土を克する、妖怪は、廬山陳太陰を破ろうとする。
神娘は木が土を克するのを見ると、西方の庚酉申に回って行く。
金が木を克する、廬山の法、金が木を克して妖怪を捉えようとする。
妖怪は金が木を克するのを見ると、南方の丙午丁に回って行く。
火が金を焼いておそろしく、蛇婆妖怪を捉えようとする。
妖怪は火が金を克するのを見ると、北方の亥子の水の中に回って行く。
亥子の水が万丈ほど高く、丙丁の火が万丈ほど高い。
高さが万丈、万丈の高さ、戦い合い、克し合って勝負を決したい。
続けて二十一日間戦っても、勝負がなかなかつかない。

台詞　四月の十日から開戦して、二十一日間、五月の一日まで、なかなか勝負
がつかない。

歌う　神娘は六人の姉と九人の妹が元気を損ったのを心配して、休戦の札を高
くかけて兵をひきもどす。

廬山の法で兵をひきもどすと、妖怪は口を開けて神娘を咒う。

今日はお前と戦って生死を決する。お前は兵をひきもどす命令を出して
はいけない。お前が死ぬか、わたしが死ぬか、お前の末日でなければ、わ
たしの末日だ。

廬山神娘はどうにもしようがなく、やむを得ず妖怪と勝負を決する。

祖師爺！と神娘は言う。

わたしは蛇妖と法の戦いをして、続けて三回戦って、元気を損った。

もし蛇妖の口に陥ったら、廬山の教えは望みがない。

神娘は戦いながら嘆く。

第一、天に頼り、第二、地に頼り、第三、日月や無数の星に頼る。

天地、三光の神さまの救いに頼って、わたし神娘一人を加護するように祈る。

神娘が大変心配しているのを、凡人は分からないが、仙人は分かった。

雷音寺で監察星官は、大悲観世音に上奏する。

大慈大悲雷音寺、わたし監察は一通の上奏書を呈上する。

わたしが上奏するのは、仏子陳十四が南江殿で蛇妖と戦って勝負を決するが、続けて三回戦うと、元気を損ったので、仏母に救援を賜うようにお祈り申す。

香山仏母は上奏を許すと、監察星官は雷音を出る。

外壇小衆神一駕、天上の監察星に恭しく捧げる。

雷音に報告した功労は大きいから、自ら得勝壇で宝の馬をもらう。

台詞 陳十四は蛇妖と法の戦いをして、続けて三回戦ったが、勝負がつかず、元気を損った。観世音は竜女を遣わして、「竜女！」「はい！」「監察官は上奏に来た。神娘は蛇妖と法の戦いをして、なかなか勝負がつかない。わたしはお前に雄黄、白玉を一瓶ずつ持たせる。これを持って行きなさい。お前は雲の上で眺めて見よ。仏子が勝って、蛇妖が負ければ、お前は彼女たちの戦いに任せていい。仏子が負けて蛇妖が勝てば、お前は白玉の粉を少し撒き、雄黄を少し撒いて、蛇妖を退治せよ。こうしてあの二人の姉妹を遊ばせる。」

皆さん！仏母はどうしてこんなふうに言うのか。仏子は戦いで元気を損って、追いつめられて逃げようがないほどだったのに、それでも眺めて見るように竜女を遣わした。二人がたがいに優劣がないのに、彼女たち姉妹を遊ばせておくんて、蛇妖を滅ぼす考えがなかったのだ。

皆さん！ここに誤りがあるのではないだろうか。観世音さまは陳十四に蛇妖退治をさせるのに、どうして彼女に蛇妖を殺させないのか。なぜなら、蛇妖は観世音さまが髪をすく時に落ちた一本の髪の毛だったからだ。この髪の毛は南海まで漂うと、蛇妖に化けた。それで「夫人伝」には誤りが無い。竜女は白玉の粉や雄黄の瓶を持って雲の上に行ってみると、おや！陳

十四は負けた。蛇妖は勝っている。この白玉の粉や雄黄を撒いてやれば、効くかどうかは分からない。

「仏母のお考えはどうだか分からない。仏子は、わたしが彼女を廬山まで案内して法の伝授を受けた者だった。もし蛇妖の口に陥ったらわたしの功労は無駄になるだろう。」少しだけ出して撒いてれば効かないだろう、と彼女は思った。彼女は白玉の粉や雄黄の瓶をあけて、全部投げてやった。

歌う 三陣の雄黄の雨が降り、蛇妖の子孫はくたくたになってしまった。
天の籠や地の網を張って、雌雄の妖怪をしっかりと覆った。
竜女は法を行って神娘を助けて、廬山の玄妙な法で蛇妖を捉える。
五月五日の日に、午の時刻の三刻に太陽がちょうど正午の頃だ。
五月五日を端陽として、蛇妖を斬ることが万古まで伝わって来た。
内壇娘々馬一駕、竜女さまは雷音に帰る。
法を助けて妖怪退治をする功労が大きい、自ら得勝壇で宝の馬をもらう。
廬山神娘は嬉しくなり、六人の姉、九人の妹も心から喜ぶ。
十三さまは竜牙の矢をつけて、力いっぱい弓を引いて矢を射る。
その矢が南蛇の左目に当たって、廬山神娘はにこにこ笑う。
十四は金の鉤を放して、蛇公妖怪をしっかりと吊した。
千年の妖怪を滅ぼすべきで、万年の妖魔の種を絶つべきだ。
一本の神剣で斬り落とされて、蛇公の頭は断たれ体が血塗れになってしまふ。

台詞 「あー！彼は斬殺された。早く逃げよう！」と蛇婆は言う。

歌う 竜女さまには誤りがある。蛇婆の負けて逃げるのを見ると、天の籠、地の網を収めることが早過ぎたために、蛇婆が網を抜けて逃げてしまった。
廬山神娘は追い付けず、神剣を一度振り回すと、蛇婆の三尺の尾を斬り落とし、その体の一部が逃げ去った。

どの州、どの県まで逃げたか、この「夫人伝」には次の文にそのことを話す。

台詞 陳十四は蛇公を、冬瓜を切るように切殺して、雷火訣でそれを焼いてしまふ。

二法師は三尺の蛇婆の尾を手にとって、「こいつをねじ切って殺そう！」

と言いながら、二つにねじ切った。一部分は一尺三、もう一部分は一尺七。

歌う 二つに切られた蛇婆の尾は二つの処へ飛んで行った。後にまたこれについて話そう。

台詞 「十五妹さん、蛇の子孫どもを、君は神剣でそれを刻んでやりなさい。」と陳十四は言う。

「蛇の子孫がそんなに多く、神剣でやるのはあまり面倒だ。君は雷火でそれを焼いてしまう方がよい。」と二法師は言う。

歌う 盧山神娘は雷火を放って、蛇の子孫を一山の灰にはるよう焼いた。

凶星は遠く三千里以外へ退き、吉星はきらきらと太平の地を照す。

台詞 陳十四は一本の帚を持って、蛇の灰を一枚の赤い袋に掃き入れる。「こんなに多くあるのね。三斗の米ほど多い。十五妹さん、君は妖怪の灰を持って、海の中に投げてやりなさい。」と神娘は言う。

「十五妹一妹の足がよく歩けない。俺に背負わせてやるほうがよい！」と二法師は言う。「二法師！君は背負ってやりなさい。」

法青はそれを背負って、背負って行きながら考えた。海まで背負って行くのはあまり面倒だ。都合しだいにあけてやればいだろう。彼は赤い袋を下してあけた。「この赤い袋はいいものだ！俺はこれを持って何かに使おう。その上の金のかんざしを俺の髪に挿せば格好がいい。」と言う。彼は道中でその蛇の灰を全部捨てた。その灰は飛んで行くうちに、蚊や蠅などに化けてしまった。

歌う 二法師は俗世に害を及ぼした。小さい妖怪を俗世に捨てておいたから。それは人間の血を吸うことが、今まで伝わって来た。

神娘は南江殿に戻って、洞の中の骸骨を全部運び出す。

台詞 あー！骸骨が山のように積んでいる。どの骸骨が長兄のものか知らない。

「指を切って、その血で長兄の骸骨を調べよう。骨肉親の血がつながっているはずだから、兄妹ということが分かるだろう。」と神娘は言う。

「妹さん！お前は竜鳳の占いができるから、占ってごらん。」と二法師は言う。

「そうだ！」と神娘は言う。神娘は竜鳳の占いをしてみると、おや！蛇妖の不埒な奴は、わたしの長兄の骸骨を海にやってしまった！巡海官はそ

れを整理して水晶宮の中に置いた。

南江殿の蛇妖の洞は後の山の峰に通じている。不運の人がそこを通れば、蛇妖に捉えられて、洞の中で食われてしまう。南江殿にお香や灯を点する人もよく食われてしまったから、骸骨がこんなに多くある。こんなことは今はもうない。

神娘はその骸骨を雷火訣で焼いて、来世生まれかわることができるように、超生咒を唱えてやった。

歌う 廬山神娘は雷火を放って、南江殿の骸骨が焼かれて灰になった。

神娘は南江殿を離れて、まっすぐに埠頭まで行った。

岸で祖師の案をしつらえて、壇に立ち、法を行う。

頭に神雲や神額をかぶり、身に神衣や神袴を着る。

足もとに占い具が置かれ、手に印を結び、口で廬山の玄妙な法の本を唱える。

左手に鈴を持ち、右手に竜角を持って、竜角の音がぴいぴいと霊壇にひびく。

竜角がどうどうと二回目ひびいて、その音が海竜王の処までひびきわたった。

巡海大人が骸骨を世話したので、法通の骸骨を俗世に返すように願う。

三回目の竜角の音が雷の震うようで、巡海大人は自ら降臨する。

十四仏子の顔に免じて、法通の骸骨を川から出して返す。

外壇大衆神一駕、巡海の役人さまに捧げる。

骸骨を返す功労が大きく、自ら得勝壇で宝の馬をもらう。

台詞 廬山神娘は法通の骸骨を南江殿まで持って行った。

歌う 廬山神娘は骸骨を並べておき、白骨煉丹の法を行って兄を助ける。

おや！一本の背中の骨が欠けているから、何かほかのものをその代りにしなければならぬ。

神娘は一本の金剛刺を持って来て、その骸骨を全部整えた。

麥粉を体に変じ、酒を血に変じ、赤や緑の絹糸を筋として並べておく。

心肝肺腎などを作って、内臓全体をそろえる。

一つの方術で黄い木や黄金を、心肝に変じて胸の中に入れておく。

魂を返す髪を頭につけ、魂を返す衣を体の上につけておく。

霊験のある符咒四枚を貼り、生返させる符咒を胸に貼っておく。

盧山神娘は印を結んで、何回も整えてやると、人間の姿に変じさせる。

その前で、祖師の案をしつらえ、壇に立って法を行って人を救う。

頭に神雲や神額をかぶり、身に神衣や神袴を着る。

足もとに占い具を置き、手に印を結び、口で盧山の玄妙な法の本を唱える。

左手に鈴を持ち、右手に竜角を持って、竜角の音が霊壇にびいびいとひびく。

竜角が二回目びいびいとひびいて、その音が九重山にひびきわたる。

あなたを招く竜角の音を聞けば、神娘の招きに応じて、法通は香壇に上がって来るはずだ。

三回目の竜角が雷の震う如く、長兄を触てみると、依然として変わらない。

人を助けるために、三回竜角を吹鳴らせばよかったのに、どうして竜角を三回吹鳴らしても生返らないだろう。

李十三お姉さんは天上の法を犯したので、冥土の地獄で苦しみを受けた。わたしの長兄は忠実な人で、どうして地獄で苦しみを受けるはずがあらうか。

まさか望郷台に事が起ったのではあるまい。わたしは望郷台まで三回竜角を吹鳴らそう。

改めてお香を焚き、ろうそくを点し、改めて竜角を吹鳴らして、その音が望郷台にひびきわたる。

法通長兄が竜角の音を聞けば、招かれるように香壇に上がって来るはずだ。

三回目の竜角の音が雷の震う如く、長兄を触てみると、依然と変わらない。

まさかその魂が五方へ漂っているのではあるまい。三回目の竜角の音が五方へひびきわたる。

改めてお香を焚き、ろうそくを点し、改めて竜角を吹鳴らして、その音

が靈壇にひびく。

竜角の音が二回目どうとひびいて、五方までひびきわたる。

法通長兄は竜角の音を聞けば、急いで香壇に上がって来るはずだ。

九回目の竜角の音が雷の震う如く、長兄を触てみると、依然として変わりがない。

人を助けるために、三回竜角を吹鳴らせればよかったのに、九回竜角を吹鳴しても生返らない。

人を助けるために始めて冥土を見回ったが、今度も冥土に行って人を助けなければならないだろうか。

わたしの長兄は忠実な人で、地獄で苦しみを受けるはずがない。

台詞 「お前は占いがうまいから、占ってごらん。」と二法師は言う。「そうね！」と神娘は言う。竜鳳の占いをしてみると、「お兄さん！あなたの言う通りだ。法通お兄さんは重なっている山に上がった。山の上に山が重なり、山に山が重なっている。お兄さんは九重の山の峰で殿祖爺となった。」と神娘は言う。

「お兄一兄一兄さんは、九重の山一山一山の峰で殿祖爺となって、毎日肉を食べられるのね。うまいものを食べているだろう。」と二法師は言う。

神娘は、神竜、神衣、神額、神剣、竜角を持って旅立つ。神娘は九重山の峰に上がって、神剣で五方に漂っている魂を呼び集めた。法通も呼ばれて来た。「法通お兄さん！」と神娘は嬉しく呼んだ。「十四妹さん！」と答えた。

歌う 最初は、お兄さんは蛇妖退治のために南江に行って、妖怪の口に陥った。妹のわたしは廬山に行って法の伝授を受けてから、南江で蛇妖を斬殺して兄を救助する。

あなたは望郷台で待って下さい。わたしは竜角を三回吹鳴らして、家に帰って来るように呼んで上げよう。

本当にありがたい。妹さんは力を尽くして、廬山の洞で法の伝授を受けた。

南江で蛇妖を斬殺して俺を助けて、まったくお前の肉親の情の深さによるものだ。

苦しんでいるお兄さんを助けるのは、妹として当たり前のことだ。ご遠慮なさるには及ばない。

廬山神娘は法通をつれて、九重山の上から望郷台まで行く。

神娘は自ら南江殿に行つて法を行つて、改めて祖師の案をしつらえ、靈壇を立てる。

頭に神雲や神額をかぶり、身に神衣や神袴を着る。

足もとに占い具を置き、手で印を結び、口で廬山の玄妙な法の本を唱える。

左手に鈴を持ち、右手に竜角を持って、初めの竜角の音がびいびいと靈壇にひびく。

二回目の竜角の音が長引いて、三回目の竜角の音が望郷台にひびきわたった。

法通お兄さんは竜角の音の招きを聞くと、急いで香壇に上がる。

内壇小衆神一駕、法通法師は生返る。

生返つて手足がひくひく動き出し、顔立ももとのようになった。

生返つてしゃっくりもでき、声を出して、つづけて大声で叫ぶ。

台詞 「妹さん！俺の体中の骨がひどく痛んでいる！」神娘が口を開かないうちに、法青は先に言った。

「おお！長く水に浸っていたから、リウマチになるのだ！」

歌う 法青の言った通りに、法通は俗世に帰ってからリウマチにかかった。

台詞 「妹さん、俺の足はまだよく歩けない！」と大法師は言う。

二法師は妹が口を開かないうちに言った。「ほら！足が不自由になるだろう！」

歌う 二法師の言った通りに、法通は俗世に帰ってから足が不自由になった。

台詞 廬山神娘は祭りの役をつとめる家の人たちを呼び出して、南江殿の掃除をさせる。七本の垂木をこじあげ、鴛鴦瓦を剥し、梁を換える。改めて、七本の垂木を釘付にし、鴛鴦瓦で尾頂をよく葺き、祭りの役をつとめる家の人たちに水を担いで来てすべてのものをよく洗ったり、水をかけたりするように命じた。七昼夜洗ったりしてから、額が臨水廟と改名される。

歌う 南江殿が臨水廟と改名し、これから大賢が悟りを開く時に臨水宮で休む。

内壇娘々表七駕、七星娘々は臨水宮を守る。

内壇衆神表二駕、竜虎神将は臨水宮を守る。

内壇土地馬一駕、土地尊神は臨水宮を守る。

祭りの役をつとめる家は祝宴を催して、盧山陳太陰をもてなす。

神娘の妖怪退治の功労は大きく、あなたはどこの方で、お名前は何というか。

わたしは福州侯官県、臨水中村の陳姓の者だ。

父は上元、母は葛氏、長兄は法通、次兄は法青だ。

三番目の者は陳十四、十四はわたしの名前だ。

長兄は南江で妖怪退治のために蛇の口に陥った。次兄は家に帰ってこのことを知らせた。

妹は兄を助けるために盧山に行って、師の奥さんに神娘と名づけられた。

十三歳で盧山の教えを受け、三年法の伝授を受けてから洞を出る。

先に庶民を助け、後に兄を助けるように祖師に言い付けられた。

後に神娘が悟りを開く時に、お香を受け、福をもたらしてこの宮に休もう。

道中妖怪退治をして人を助けて来たが、今わざわざ兄と君たちを助けるために来た。

おお！神娘にお礼を申す。

内壇衆神六駕雲一片、五虎上将是雲に乗る。

内壇娘々十五駕雲一片、六人の姉、九人の妹は一緒に雲に乗る。

福建侯官県を離れて、雲から下りて家に帰って両親を拜む。

家中の老若は嬉しくなり、文武の神々は旅立つ。

伯父、伯母に別を告げ、法通と法青兄に別れを告げる。

娘々馬十五駕雲一片、六人の姉、九人の妹は雲に乗る。

雲に乗って各州、各県に帰って、雲から下りて両親を拜む。

家中の老若は嬉しくなる。このことはさておき、後にまた続けて語ろう。

「夫人伝」に神娘の盧山の法のことを話し続けよう。

台詞　神娘の考えでは、もう妖怪をきれいに退治し、人を助けることも円満にできた。わたしは南雲楼に帰って一心に読経する。

内壇娘々馬一駕、十四は南雲楼で読経する。

読経したり、仏を拝んだり、読経したりする。

この「夫人伝」に南雲楼のことはさておき、次の文にまた続けて語ろう。

「夫人伝」にさらに蛇婆妖怪のことを話そう。蛇婆妖怪は体が二つになってから、逃げ去った。

どの州、どの県に逃げて行ったか、西溪臨福塔まで逃げると、また騒動を引きおこす。

台詞 蛇婆の体が温州西溪臨福塔まで逃げると、騒動を引き起す。その妖怪はもっぱら人夫が朝早く出かけて、蛇婆の処を通れば、捉らまえられて食われる。夕方帰る時にも、人夫が捉えられて食われることがある。

ある日、牛飼の子供に見つけられた。「お前さん！あの桶に長い、長いものの、あれは長く長くて大きい、人間の頭で、蛇の体、真白く水桶のような太いものだ。俺たちはそれを退治する組を作ろう。一枚の黄い布に、赤い縁をつけて、その上に『妖怪を捉える大王、鬼を捉えてつゆにする』と書く。」そして、期日を選び定め、知らせを出して、子供たちを呼んで来る。小さい方は八歳、九歳、大きい方は十二、三歳ぐらいだ。その日になると、集まって来た子供たちは三千人ほどある。

臨福の地の広さはどのぐらいか。

それはかまわない！二十六の都毎に来る子供がある。彼らは石を持ち上げて来たり、石を担いで来たりして、山ほど積んでおく。それで、石の山も崩されてしまった！蛇婆はびっくりして、「臨福の地はこんなに住みにくい処か。ここに来た子供たちはまだよく歩けないのに、わたしを滅ぼそうとしている！」と言う。

歌う この地は花を植える園でなく、沸いているつゆは魚を飼う池ではない。

台詞 「ここはわたしの安心できる地方ではない。」と蛇婆は言う。

歌う 妖怪は飛ぶ鳥や走る獣に化けたりして、臨福を離れて旅立つ。

台詞 皆さん！蛇婆妖怪はとてもおそろしいもので、どうして牛飼いの子供たちを恐がっているか。陳十四が大兵を率いてあいつと戦っても、あいつは恐がらなかったのに、却って牛飼を恐がるのはどういうわけか。ここに原因がある。蛇妖は陳十四と戦ったあげく、尾が彼女に斬り断たれて、元氣

を損った。丹薬を煉ることがよくできず、心の中が空虚になった。だから逃げ去った。

蛇妖の考えでは、陳十四に復讐するのはやさしいことだ！あの陳十四はきっと南雲楼で読経するだろう。わたしは夜三更に南雲楼に行って、彼女の命を取って仇を討つことができるのだ。蛇妖は蜜蜂に化けて福州へ飛んで、陳宅の家の梁の穴に身を隠した。

二法師は、二更の終り、三更の始めごろに、小法事を頼まれた家から家に帰って来た。彼は庁堂に入ると壁が少し斜になり、扉が閉められないのを見ながら、「お金を払って、修理すーすべきだ。」とどもって言う。

蛇妖は法青の言うことをはっきり聞えず、もう法青に見付けられたと思って、法青が蛇妖が人間を食いたいと言ったように聞き取った。彼の神眼は本当に恐ろしいものだ。彼に見つけられた以上、陳の家の仇を討つことができない。早く逃げよう。と蛇婆は考えた。

歌う 蛇妖は飛ぶ鳥や走る獣に化けたりして、陳の家を離れて旅立つ。

蛇妖は指を折り占いをし、方々の様子を占ってみた。

占いが一つの大国の王朝に当って、天宝皇帝は乾坤を掌握する。

その蔡皇后は不運で、蛇妖がこの国の昭陽で大騒ぎをする。

蛇婆妖怪は嬉しくなる。この「夫人伝」にこのことはさておき、次の文にまた話す。

「夫人伝」には大国の王朝のことについて述べる。天宝皇帝は朝廷で政務を裁可する。

蔡皇后は宝得宮に起居し、皇帝の妃や妃に次ぐ者は奥の宮にいる。

まだ太子や内親王がいない。優れた文武の役人が国を治める。

八月十五日の中秋節に、皇后さまは思案する。

八月十五日の黄昏に、花園で月をめでて気晴らしをしよう。

蔡皇后は考えをきめて、礼服を着用し、宝の飾りものをつける。

宦官や宮仕えの女が護衛して、皇后さまのお伴をして宮を出る。

天子も花園に見え、星がきらきらし、月が明るい。

月が池のほとりの木の枝に照らし、風に吹かれた木の枝がゆらゆらと揺れ、清い波が揺れ動く。

皇后は宮殿の入口の台へ歩いて行き、^{あずまや}亭に端座して星を見る。

宦官や宮仕えの女が仕え、外では蛇婆が宮中でさわぐ。

台詞 皇后はあずまやに端座している。蛇婆は宮中でさわぐ。蛇婆は宮殿の中に入ってさわぐのではなく、あいつは蜜蜂に化けて、皇后の座る処に飛んで、皇后の目の前で飛んで来たり飛んで行ったりする。宦官や宮仕えの女たちはあいつを追い払っても無駄で、宦官は急いで袖で追い払おうとする。

歌う その蜜蜂が皇后の袴のひだに入り込んだりするので、皇后さまは立ち上がる。

宮殿の入口の台を離れて、宮仕えの女たちが護衛して宮に帰る。

皇后は昭陽宮に帰って、礼服を脱ぎ、飾りの宝物を外す。

妖怪は天子の寝台の後に隠れたが、皇后さまは分からない。

夜が静まって二更が過ぎると、天宝皇帝は来られた。

蔡皇后にあいさつしてから、竜鳳の寝台に一緒に休む。

二更以後、三更の初めに、妖怪は頭を伸して正体を現わす。

皇后さまの寿命がまだ尽きず、運も尽きないから、妖怪は頭を縮める。

台詞 しばらくしてから、妖怪はまた頭を伸してみたが、皇后の寿命がまだ尽きず、運も尽きないから、妖怪はまた頭を縮める。さらにしばらくしてから、妖怪はまた頭を伸してみると、皇后の寿命が尽き、運も尽きた。皇帝も目覚めない。

歌う 妖怪は嬉しく思って、蔡皇后に手を下す。

体の肉を食い尽くして、銀のような白い骸骨を残す。

その骸骨を天子の寝台の後に隠して、自分は蔡皇后に化けた。

天子のお供して、竜鳳の寝台の上に休む。

台詞 宮中の妃や妃に次ぐ者は全部妖怪に食われた。

「南游」には、ここに誤りがあるようだ。千万遍読んでも、「夫人伝」には誤りがない。皇后さまは国の第一人者で、皇后が食われ、妃が食われ、妃に次ぐ者も食われてしまったのに、どうして全然分からないか。

皇帝は肉眼で、人間と妖怪を判別することができない。その妖怪は皇后に化けて、その声、身丈、身形が皇后にそっくりだから。妖怪は一人の宮仕えの女を食うと、一人の紙人形を作ってそこに置く。作られた紙人形は

天子さまを迎えることができ、天子のお伴をすることもでき、詩や対句などを話すこともできる。だから、妖怪が宮中でさわぐ。後に陳十四は功を立て、封神される。「南遊」には誤りがあると言われるのも無理ではない。

「この地方はよい、旨いものをよく食べてお金もある。」と蛇婆妖怪は言う。